

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390300525		
法人名	有限会社介護生活研究所		
事業所名	グループホームすずらん		
所在地	熊本県人吉市鬼木町1423-1		
自己評価作成日	平成29年11月30日	評価結果市町村受理日	平成30年2月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成30年1月16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「その人らしい人生」で最期を迎えられ、ホームでの生活の中に喜びや楽しみが感じられるよう、目配り・気配り・心配りをしています。特に、看取りの期間は本人並びに周囲の入所者が安心できる声掛けや環境作りに努めています。食べる喜びを継続するため、咀嚼・嚥下状態により食形態や食材の提供を行っています。熊本地震でも地域との連携の重要性が出ていましたが、ごこ人吉でも非常事態発生した際の、地域支援の拠点となれるよう日頃より地域やその住民の方と相互理解を行い、共存できる施設にしたいと努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

昨年の管理者異動に伴い新体制となったホームでは、前任者の思いを引き継ぎながら新たな取組にチャレンジし、理念の見直しに着手している。新理念の「その人らしい人生を送ってもらうための10の約束」は、入居者の日々の暮らし方に焦点を当て、以前のように外出がスムーズにいかなくなった現状に、こちらから出向くのではなく地域の人々に来てもらうなど工夫をしている。また、リビング内に手作りの神社(鳥居)を設け、居ながらにして参拝できる雰囲気を作ったり、食への関りでは見た目にも通常食と遜色のないソフト食を提供するなど継続して努力している。「毎日が同じ生活にならないようにならないうように何かで楽しんでもらいたい」とする職員の言葉がそれらを物語っている。入居者の最終までを支えるホームでは、“寄り添う看取り”を各職員がしっかりと認識し、対応にあたっており家族からの感謝の言葉が綴られている。今後も法人の力を活かしながら、心のこもった支援の継続に期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	今年8月に「ホーム理念を職員全員で考え、理念・達成するための10条の約束事を取り決めた。自分達が日々実行できる事を主とし、朝の申し送り時に唱和したり、目に留まるよう職員トイレにも掲示して啓発している。	昨年夏にこれまでの理念を全職員で検討し、改めて“入居者に必要なもの”“自分たち職員に必要な事柄”を10の約束として新たに設定している。その人らしい人生を送ってもらうための10の約束を毎朝の申し送りで唱和し、職員は心を一つにしてケアにはいるよう努めている。	新たな理念は運営推進会議や家族会の中でも紹介され、地域や家族にホームの姿勢を示しながら、理解や協力を求めている。理念がしっかりと根を下ろすよう今後の取り組みを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年末の餅つきは地区子供会へ参加を呼び掛けている。毎朝の玄関掃除や散歩の際は、通る人と挨拶を交わしたり、話しかけられた内容には真摯に対応している。	入居者の中には過年と共に外出が困難になった方もおられ、地域交流のために出向くよりホームに来ていただくことで、入居者が人々と触れ合う時間を持つように工夫している。12月のクリスマス会には回覧板を使ってカラオケなどの参加を呼びかけ、地域の方の尺八の演奏が好評であったようだ。高校生の体験学習の受け入れ先として、数年に渡り地域貢献にも尽力している。	管理者はAED講習を地域の人々に声かけし、実現したいと語っており早期対応に期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	問い合わせの電話の際に、対応についての質問があれば答えたりしているが、地域への発信は現在もまだ実行できていない。9月の推進会議の際に、出前講座など必要があれば出向く方法もあるので、活用してもらいたいと意見は述べた。	/	/

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議でいただいた意見は近日の職員会議で報告している。先日も、看取りの際のホールでの観察について、メリットもあるがプライバシー面ではどうかという意見も頂戴したので、今後のケアについて会社へもハード面の改善を働きかけている。	開所以来2か月ごとの定期開催が実現しており、行政関係者が同席し、地域や家族の代表者が参加している。参加者はホール内の入居者の様子を確認したうえで会議室に入り、会議内容と擦り合わせることで現状把握に一役かっている。会議で得た貴重な意見はホーム運営に反映され、内容は行事ごとに家族に報告し、共有に努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎回推進会議には高齢者支援課より担当者が参加されている。権利擁護・生活保護対象者も入所中なので、状況の確認等電話・面会の際に情報交換している。	運営推進会議に参加する行政担当者に現状を発信し、同時に適切な助言や指導を得ている。管理者はアクシデント報告や書類提出で行政を訪れ、担当者と直に顔を合わせながら情報を共有するよう努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	夜間の防犯目的での施錠は行うが、それ以外は開放しており、所在確認の見守りを介護者側が足で行っている。	日中の玄関は常にオープンであり、職員の見配り気配りの中で入居者が自由に行動している。転落の危険性がある入居者に家族の承諾を得て、ベッド背面に音感センサーを設置しているが、入居者の行動を制限しないよう十分配慮している。職員は内外の研修に限らず、日常的に事例をあげながら、身体拘束について考える時間を持っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修の機会があれば参加するよう意識づけしている。普段から様々なケアを行っているが、これは虐待になっていないかと自問自答・職員間で意見を交換しながら努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	対象となる方がいたので、親族へ後見人申し立ての依頼を行ったことがある。経緯や依頼後の進捗状況は随時職員へ報告した。甥も当初困惑されたが、必要性の説明を行い腰を上げていただけた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	内容を説明したうえで、書面を交わし合意を得ている。看取り加算については、医師の説明があつて後、特に慎重なケアとなる事を伝え、ケア内容を確認してもらい算定させてもらっている。費用負担で施設移行希望の方には、速く進むよう支援している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会を年に1回計画しており、その際に家族と面談し意見を伺う機会の一つとしている。電話やメールを活用したり、郵送物に近況の便りを付けるなど、こちらの動向は隠さない方針で家族等と接することで、意見を言いやすい関係作りに努めている。	遠方にて普段なかなか来れない家族も、家族会には足を運ばれており、ホームの現状を伝えながら家族の思いを十分引き出すように心を配っている。前回、看取りについてホームの方針を説明したうえで、家族の意向をじっくり聞く時間もたれている。入居者の意見は普段の会話から聞き取り、生活の中に反映している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月第4木曜日に職員会議を開催。意見を聞くようにしている。その他、通常勤務時必要があれば随時対応している。今年8月より、会社幹部が職員会議に参加するように手配されている。	ケア会議を兼ねる毎月の職員会議で意見交換を行い、全職員が入居者の現状を共有している。上司が会議に出席することで現場の声を直接聞く機会とし、シーツ交換の週1回への取り組みを決定したり、職員増員を検討するなどケア向上や業務改善に活かされている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	意見や希望を聞き、就業体制を工夫できる部分は工夫するなど、できるだけストレスをためないよう働きやすい環境作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修計画を立て実施、外部研修会の案内を職員が見える所に掲示し、希望の研修会には参加してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域のブロック会の研修や交流会に参加し、意見交換を行っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面談は主として本人以外のことが多い。自宅の生活の延長となるよう、習慣や日課を伺い施設で継続できるかどうか職員と検討をして、入所後のサービスに反映するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族面談時は、間接的に関わる家族の入所への理解の程度を聞くようにしている。本人の現在の意向やそれに対する相談者の意見を聞き、温度差があるようならば、それをなるべく埋め合わせできるように相談の中で調整するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅中の地区行事や慣例となっている行事への参加は妨げていない。施設設備以外の福祉用具も必要性が高くなれば家族へ説明し、手配するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除や調理、洗濯物の手伝いは、その日出来るような方に依頼している。その際は、行動による疲労感や心身の負担が増大していないか観察し、手伝いをすることが逆に負担とならないよう、職員間で話をして配慮している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	疎遠の方には家族参加の行事の案内を出し、来所を呼び掛けている。気分の落ち込みが伺える方の家族には、メールで面会を促すこともある。本人と家族のこれまでの関係を伺いながら、疎遠となる故も理解しつつ、距離が近くなる機会を見逃さないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	時間を限らず面会してもらったり、地区行事への参加も続けてもらっている。馴染みのある場所へドライブに出たりしている。事業所系列のデイ利用者だった方は、希望があれば週1回ではあるが日中そちらで過ごし、今までの顔馴染みの方と会う機会としている。	家族や知人の面会時には入居者の近況を伝え、ゆっくり過ごしてもらおう様配慮している。職員とともに地域行事に参加したり、系列のデイサービスとの交流も入居者には馴染みの外出となっている。家族の協力により自宅のある地元の老人会やミニサロンへ参加して、懐かしい人々と再会する機会も支援されている。入居者の折り紙やちぎり絵などの手作業作品は、季節ごとにリビングを彩り、草取りや台所仕事などに入居者の特技が活かされている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共同生活の場での利用者同士の言動に注意し、疎外感を感じないように常に配慮している。手伝いや他者への思いやる行動に対し称賛し、お互いに助け合って生活している意識が持てるよう声掛けしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	転居の際は情報を提供したり、実際の面談時に直接説明し理解を深めてもらう努力をしている。利用終了後の家族への郵送物の中に、一筆綴ったものを入れて、継続的な関係が持てるようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中で聞こえてくる声に耳を傾け意向を把握するようにしている。出来そうなことはその場で話し合い、対応を協議し実行している。実践後の結果を受け、改善点や継続について再度話すなど、ケアに繋がるかどうか吟味している。	職員は普段の関りから入居者の思いを聞き取り、日々の支援に反映させながら、ホームでのより良い暮らしに繋げている。難聴の方には職員が1体1でジェスチャーを交えながら思いを引き出し、表現困難になられた方には、表情やしぐさ、反応から推察し、家族の意向と合わせながらより本人の思いに近づくよう努力している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時の情報を共有したり、その後の会話で知り得た情報を周知するなど、記録物や職員間のコミュニケーションで把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	申し送りや日常の行動観察で、その方の生活リズムを把握している。発見や疑問があれば随時報告しあい、より本人を知るよう努力している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランに基づき介護ケアを提供している。新たに上がった課題については、一時的な継続性があるか検討している。ケアプランは3ヶ月毎に見直すようにしているが、アクシデント等あった時は、状況に添った計画かどうか随時見直し、新規プランを作成している。	職員を入居者の担当制とはしておらず、日頃の気づきや入居者の声をケア会議にあげ、プランに反映させるようにしている。一冊のファイルに医療情報や日々のケース記録とともにケアプランを綴じ、いつでも確認出来る状態で管理している。家族へのプラン説明時にはわかりやすい言葉と表現を心掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録はフリースタイルとしており、必要時は文字以外での記載も行っている。重要なポイントは色を変えるなど、一目で注意することが分かるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	系列事業所に限ってだが、デイの継続を行ったり、必要な福祉用具の自費レンタルの手配を行ったりしている。食事に関しては、刻み食を廃止し、食感を残した食事の提供となるようソフト食の提供もしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	理髪訪問は適宜利用。消防訓練も年に2回消防署、消火器点検で業者来所している。買物に行けない方の靴購入時は、商店に訪問してもらった。その後も同様の件で訪問販売に繋げられた。受診困難者への往診もかかりつけ医・皮膚科医と対応してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医への受診・往診が基本となっているが、眼科・皮膚科・精神科は本人・家族の意向で受診。本人・家族の意向で、従来のかかりつけ医への受診もある。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援しており、協力医への受診・往診や、家族によりこれまでの医療機関への受診が行われている。インフルエンザの時期には協力医への受診も往診へ変更されている。結果については薬の変更など何かあれば、早めに家族へ報告し、状況を共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	血圧・体温測定は日々実施。バイタル異常があれば看護師が報告を受けいている。食欲・水分量・排便状況の観察、高齢者の肺炎は高熱に加え、活気低下や食欲低下も重視するよう伝えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は治療目標を医療機関に確認し、どの段階でホームへ戻せるかの目安を伺うようにしている。治療効果がない場合の家族の判断も随時聞き取り、医療機関へ情報提供し、住み慣れた施設へ早期に戻るよう配慮してもらっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態低下時の診察内容を把握し、家族へ早い段階で報告し状況を理解を得ている。今後について意思確認を適宜実施し、看取りの対応について職員で検討会を行った意見も家族へフィードバックしている。家族には、電話やメールで随時状況を連絡。職員への周知も記録やラインで実施。	入居時にホームの看取りに関する指針(緊急時マニュアルや看取りケア説明、事前指定書、医療連携同意書など)をもとに説明を行っている。入居の時点では、家族の考えも定まっていないが、今は元気であっても、今後のことを考えておくことの必要性や気持ちは変化するものであり、その都度話し合っていくことを申し添えている。ホームでは今年度2例の看取り支援を実施しており、支援後はデスクカンファレンスを行い、家族より頂いた感謝の言葉を共有しながらその方を偲んでいる。	管理者は普段の業務の中で、緊急時の対応や心がまえについて指導を行うとともに、職員のメンタル面についても配慮し共にケアにあたっている。亡くなる前日まで、ベンチシャワーを使った入浴など工夫やチームワークでその方の最終を支えている。今後も、本人・家族の思いを大切に支援に努めていかれることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急手当については、日頃の処置時に適宜指導。事故発生時は慌てず全身状態・意識状態を確認し、看護師へ報告するよう指導している。利用者の状況で起こり得るような急変について、想像上でシミュレーションをすることもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の防火訓練実施。防災の日にちなみ9月に災害対策の検討会を実施した。避難誘導の協力体制や備蓄品の準備不足あり。	今年度2回の避難訓練を実施しており、うち1回は消防署の参加が得られ、居室の避難確認方法を決めておく必要について指導を受けている。備蓄については3日分の確保を意識を持って行っている。火災は火を出さないことが一番であり台所やコンセントなど安全管理に努めている。	今後は運営推進会議の中での訓練や近隣地域への参加協力を呼び掛けるなど取り組みに期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	何事にも尊重とプライバシーはついているので、疑問に感じられたケアや実施者が感じたことなどは、考え方や捉え方について適宜意見交換をしている。	入居者への尊厳やプライバシーに配慮した支援については、会議などでも共有を図り、気になることがあればその都度意見交換を行っている。呼称は苗字や名前にさん付けとし、基本とする同性介助についても本人や家族、これまでの担当ケアマネジャーに確認している。個人情報の提供や保護については、契約時に書面で丁寧に説明の後、了承を得ている。また、職員の守秘義務についても入職時や研修会などで周知徹底している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉以外のコミュニケーションや観察により、利用者が何を望んでいるのか察知するよう心掛けている。周囲に流され、本意ではない選択をされないよう、気持ちを引き出すような声掛けになるよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日常生活の時間に関して強制はしていない。食事や休息时间、就寝時間についても、周囲の方の動向を見て声をかけてはいるが、本人の言動を見て合わせるなど配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	日に何度も着替えたりされるが、好きなようにしてもらっている。気候に合わせる事が出来ない方に関しての着脱は、促すような声掛けに努めている。理髪については、家族と出掛けた時にされる方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は調理担当者が提供している。食形態についても常食・ソフト食の2種を作成。誕生日の方の嗜好を取り入れたり、季節食を提供するなど工夫している。	献立作成や調理は毎食、専任者が中心に行っており、季節感や盛り付けにも工夫し、身体状況によってソフト食も準備されている。また、これまで自宅でのパン食を継続して提供している。誕生会では手作りケーキにローソクを立て祝うなど、希望メニューに限らず、全入居者も楽しめるよう工夫している。芋の皮むきやささがき、茶わん洗いなど入居者も出来ることで食へ関わっており、食事は1名の検食者が味や量、入居者のコメントなどを記録に残している。	地元の祭り時には赤飯や郷土料理のつぼん汁の提供をはじめ、行事食にもこだわっている。今後も入居者の楽しみとなるような食事支援の継続に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養については、体重測定・採血データの確認で評価している。口腔内の状態や義歯の具合、嚥下や咀嚼機能を観察し、状態に応じた形態を変更している。また、自宅での食生活の取り入れとして、時々パン食も提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	それぞれの能力に応じ声掛け・見守り・介助している。自主的にされる方の物品の確認や衛生面は間接介助している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	必要な方に関しては、リハビリパンツを含むオムツを装着しているが、トイレ排泄へ基本誘導している。オムツ使用でもトイレ汚しや失禁状態が日常的な方もいるが、トイレ使用禁止はせず、失禁時は更衣、トイレ汚し時は掃除で対応している。	日中はトイレでの排泄を基本とし、声掛けや誘導を行っている。排泄用品も昼夜で使い分け、尿取りの組み合わせなど個々に応じて適切なものを検討している。また、トイレ内は小まめに汚れなどないか確認し、夜間のみ使用される方のポータブルトイレも清潔に管理している。排泄用品はホームで購入しているが、家族が持参される方には、サイズなどをアドバイスしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄状況は毎日チェック、水分量と比較し不足している時は飲む機会を増やすようにしている。また、9時と16時に提供するポカリゼリーにオリゴ糖を混ぜるようにしている。力まない排泄を心がけており、服薬も必要時調整している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週3回の入浴を基本としている。体調や気分に応じ促している。本人の習慣で毎日提供する人もいれば、尿便汚染が常だが入浴拒否と暴力行為のため、強制的にケアしている人もいる。	入浴はその都度湯を入れ替え、基本的に週3回の支援としているが、100歳を過ぎた方には負担を考慮して2回としたり、皮膚疾患時は毎日入るなど個々に応じ取り組んでいる。拒否の強い方には家族へも状況を伝えたり、入浴の様子を見てもらうなど対応を検討し、清潔保持に努めている。冬至には柚子を入れたり、母の日や父の日には入浴剤を選んでもらい楽しい時間となるよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中でも居室で休むことを制止することはない。夜間の睡眠に影響を及ぼさない程度の時間を心がけており、適宜声掛けして離床を促すこともある。日中の活動も動的・静的を取り入れ、時に散歩や外出も促している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬の詳細はカルテにあるので常に目を通せる状態にしている。体調の変化時は看護師へ相談があるので、医師に確認したりして調整、その後については申し送って経過を見ている。気になる時は受診時に用量について医師へ相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	手伝いを好む方は、台所仕事や掃除等見守りの中で出来ることを負担感ない程度に依頼している。会話の中で趣味や嗜好について話が出た時は、それを参考に行事やレクに繋げている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出は行事計画で行うことが多く、時に状態に応じ、買い物同伴を促すこともある。	入居者の身体状況に応じながら、花見や弁当を持っての紅葉狩り、祭り見物(おくんち)の他、地元青井神社の様子を車窓から眺めるなど、季節に応じた外出に取り組んでいる。また、ホームの庭先から眼下に地域を眺めたり、季節ごとに草花や樹木の彩りを楽しみ、天気の良い日はお茶会の時間も持っている。日用品をはじめ、それぞれ必要な買い物は個別支援で対応している。	入居者の状況から遠出や全員での外出は困難な場合もあり、今後も敷地内や近隣の散歩など身近な外出や外気浴の機会を持たれることを期待したい。今後も運営推進会議の中で外出支援に繋がる情報を得たり、家族の面会時に散歩を依頼することも一案と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	預り金は個々に家族と相談し取り決めている。自分で持たせていてもいいという方については、所持は規制していないが、紛失に関しては理解を求めている。使用額の認識が薄い方については、購入物を控えるよう助言することもある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙・電話の規制はしていない。受け取った郵便物は開封せず渡し、書かれた手紙の差出は代行している。電話も時間を問わず取次ぎしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	特にトイレ汚染がないよう心掛けている。季節を取り入れたディスプレイを行い、話題の一つになるようにしている。ADLと導線を考慮し、ホールでの席も取り決めている。	共用空間は清潔と入居者が季節感の中にもメリハリを持って過ごせるよう、職員は毎月工夫しながら環境の整備を行っている。直近では寒さや人の多さで初詣も難しい方のために、リビングの扉を活かした鳴らし鈴(本坪鈴)も付けた参拝用神社の作成などアイデアがより新年の雰囲気を出したようである。入居者が食事をはじめ、日中の殆どを過ごすリビングは、その時々でテレビやラジオ、CDなどを流し、席の配置も関係性や介助の度合いなどによって決定している。	参拝用の神社に次回は賽銭箱の設置など更なる職員の構想が聞かれた。今後も入居者にとって不快などもなく居心地よく過ごせる共用空間に努めていただきたい。また、玄関は入居者や来訪者を迎える場所でもあり、不要な物は別の場所で管理することが望ましいと思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファをフロアに置き、くつろぎの場所になっている。二人掛け・三人掛けとあるので、気心の知れた方は一緒に座ったりしている。一人掛けの椅子もテーブル席とは別に置いているので、状況に応じ座る事を促すこともある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所当初の荷物持ち込みされた物は、基本最期まで居室に設置している。追加持ち込み時は相談があるが、これまで持ち込みを拒んだ物はない。	使い勝手の良い広さと収納庫が設けられた居室には、馴染みのタンスや必要な小物・衣類・テレビなどが持ち込まれ使いやすいよう整頓されている。ベッドの向きや高さなど個々の状況に応じて設定し、室温や加湿にも配慮し、居心地よく過ごせるようにしている。夫婦で入居の方は、入居年数を重ねても1室を寝室に、家具や衣類置きなどをもう1室に利用され安心した日常を過ごされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ベッドの高さなどはADLに応じ合わせている。自分で静養される方の為、洗面台に歯ブラシを置いたり、誘導で出来る方にはその都度渡している。座る席のトラブル回避の為、さりげない誘導や座布団での区別をしている。		